

追悼 川喜田愛郎先生

日本医史学会常任理事 酒井シヅ

日本医史学会の理事であった川喜田愛郎先生は三年前に脳出血で倒れられて入院され、その後、自宅での療養生活を続けられていたが、みなが願っていた再起をついに果たせず、一九九六年一月六日に召天された。

先生は一九三二年に東京帝国大学医学部を卒業され、同年から東京帝国大学附属伝染病研究所に入所され、一九四一年から一九四九年に千葉大学医学部に微生物学教授に赴任されるまで同所の助教として日本脳炎などウィルス学の分野で最先端の研究をされていた。千葉大学に赴任されて間もない一九五二年、WHOの技術専門職者としてエジプトに出張され、一年半あまり滞在されたが、このときの経験をしばしば楽しそうに語られた。仏語、ギリシャ語、ラテン語

を熱心に学ばれたという。先生は語学に堪能であり、洋書の読書量が並はずれていたことはご蔵書や著書からも伺える。戦時中に物資不足で十分な研究ができなかつたときに歴史書や科学書をずいぶん読まれたのが、のちの大部の医史学書の執筆の礎となつたとき。

一九六八年から千葉大学学長になられたが、おりしも国内はもとより世界中に怒濤のように学生運動が広がり、重責にあつた先生はこれにずいぶん苦しめられ、苦勞され、一九六九年に退職されたが、当時のことはあまり積極的に語



故川喜田愛郎先生

られることはなかった。

先生は微生物学に加えて、岩波新書の『感染論』『パストゥール』『ウイルスの世界』など一般向けの書物を書かれ、はやくからその名が世に知られていたが、日本医史学会に関与されるようになったのは一九七七年に出版された『近代医学の史的基盤』上下二冊（岩波書店）の著作で日本学士院賞を受賞され、突如、西洋医学史の泰斗として登場されたあとである。先生の学士院賞受賞は、医史学の分野では富士川游先生の『日本医学史』の受賞につぐ二度目の快挙で、七〇年余ぶりのことであつた。先生はこの著作に学長を退官されてからのほとんどの時間を費やされたそうで、後にこのときほど勉強したことは久しくなかつたと述懐されていた。また、資料を求めてしばしば海外へ行かれたが、そのときに出会つた人々の話や外国の古本屋の話を、背を丸くして懐かしそうに語つてくださった。

先生は医学生るときから内村鑑三の無教会派のキリスト教徒として、塚本虎二に師事した誠実なキリスト者であり、良心と異にすることに寸分の妥協も許されなかつた。『近代医学の史的基盤』を上梓されてからの二〇年間、先生は峻厳な自然科学者、キリスト者としての医学、倫理、生命、信仰の問題を語つてこられた。それと同時に野間医学科学資料館の館長として館の発展に尽くされ、谷口シンポジウム医史学部門の責任者として年に一度、外国の医史学者と親しく交わられ、看護婦の再教育のための医学概論の講義を教えられていた。そのいづれにも楽しまれておられた。そのときの看護婦の講義録は『医学概論』（真興交易医書部）にまとめられている。思うに先生の主たる関心事はキリスト者の立場からの人と医学であり、その関わりの中で生命とは、医とは何かを問われ続けられた。先生の医の倫理、生命倫理、信仰についての考えは『生命・医学・信仰』（新地書房）になつたが、その書物はわれわれの行く手を良心として照らしている。先生は不法な振る舞いには厳しく、ときには声を荒げられることすらあつた。だが、ゆつたりとしたときは細めた目からこぼれるように笑みを浮かべ、われわれの饒舌を聞かれていた温顔が臉に浮ぶ。ご冥福をお祈りしつつ筆をおきます。